



日本語の二重他動詞由来他動詞について

山口, 貴也

(Citation)

神戸言語学論叢, 10:51-68

(Issue Date)

2016-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81009333>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009333>



日本語の二重他動詞由来他動詞について

山口 貴也

神戸大学大学院

1. はじめに

本論では、日本語における二重他動詞を基にして派生される他動詞(以下、「二重他動詞由来他動詞」)について議論する。この種の他動詞は「教わる・預かる・授かる・賜る」などが該当する。^{1,2}

(1) 「教える/教わる」

- a. 田中先生は太郎に英語を教えた。
- b. 太郎は田中先生に英語を教わった。

(2) 「預ける/預かる」

- a. 花子は次郎にカバンを預けた。
- b. 次郎は花子からカバンを預かった。

従来、(1a) や (2a) のような二重他動詞を基にして派生される他動詞は、内項として基底生成される受け手名詞句 ((1b) における「太郎」や (2b) における「次郎」) を移動によって外項化し、主語に昇格させる分析(田中 2012) や動作主が統語構造上に具現化されない「脱使役化」が伴う分析(影山 2006) などが行われてきた。本論ではこれらの先行研究に対する妥当性を検証し、代案を提示する。本論の提案は以下の三つである。一つ目は、二重他動詞由来他動詞が意味役割として動作主が付与された主語名詞句を伴うことである。二つ目は、受動形態素である *-rare* と *-ar* の性質を特定することである。三つ目は、動作主を導入する受動形態素の性質を示すメカニズムとして $[\pm\text{Agent}]$ を導入することである。 $[\pm\text{Agent}]$ とは、外項を *vP* の指定部に導入するかどうかを示す概念である。

本論の構成は以下の通りである。第2節では、二重他動詞由来他動詞に対する従来の研究を取り上げる。先行研究として、内項が移動によって外項化されることで二重他動詞由来他動詞の主語として認可されると分析した田中(2012) と外項が統語構造上に具現化されない脱使役化が伴うと分析した影山(2002) を取り上げ、問題点を指摘する。第3節では、田中(2012) や影山(2002) の代案として、動作主指向副詞と動詞句前置を用いて二重他動詞由来他動詞が主語に動作主を導入することを示す。第4節では、二重他動詞由来他動詞の派生メカニズムの提案を行う。最後に、第5節では、本論のまとめと今後の課題を提示する。

2. 従来の分析

本節では、二重他動詞由来他動詞の先行研究について概観する。一つ目に統語的な分析として田中 (2012) を検討する。田中 (2012) は、二重他動詞由来他動詞の内項である「受け手名詞句」が *vP* を経由して *TP* まで上昇し、主語として認可されることを主張している。次に、語彙意味論の観点から分析を行った、影山 (1996, 2002) を検討する。影山の研究は、二重他動詞由来他動詞を伴う文が脱使役化によって外項が抑制された文であると分析している。

2.1. 語彙的受動態

まず、先行研究の一つ目として「教わる・預かる」のような二重他動詞由来他動詞を「語彙的受動態」として分析した田中 (2012) を扱う。田中は、日本語の受動形態素を (i) 統語的受動形態素 *-rare* と (ii) 語彙的受動形態素 *-ar* の二種類に区別している。

- (3) a. 花子が太郎に空手を教えた。
 b. 太郎が花子に空手を教わった。 (語彙的受動態)
 c. 太郎が花子に空手を教えられた。 (統語的受動態) (田中 2012: 569)

(3a) の動詞「教える」に統語的受動形態素 *-rare* が付加されると (3c) の「統語的受動態」が派生される。一方、動詞に語彙的受動形態素 *-ar* が付加されると (3b) の「語彙的受動態」が形成されると田中は主張している。

次に、田中が主張する日本語の受動形態素が付加される位置については、(4) に示す。

- (4) a. [V ... v]-*rare* (統語的受動態)
 b. [V ... -*ar* ... v] (語彙的受動態) (田中 2012: 570, 一部修正)

統語的受動形態素 *-rare* は動詞句の外部に付加するのに対して、語彙的受動形態素 *-ar* は動詞句内部に付加されると田中は分析している。

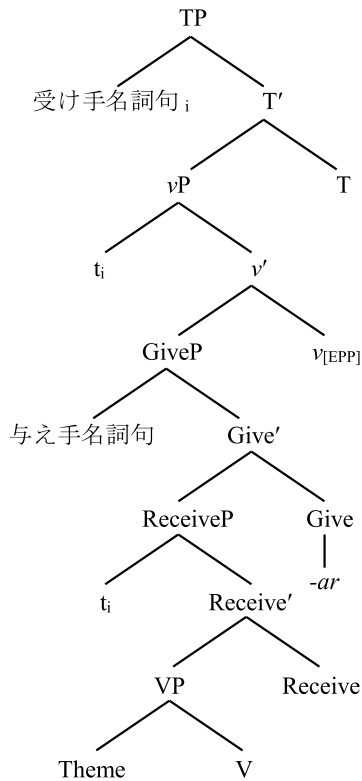
次に、田中は、(5) のタメニ節に存在する空主語のコントロールにおける同一指標の分布から、語彙的受動態の主語名詞句が外項であると分析している。³

- (5) a. 太郎_iが花子_jによって [PRO_{i*j} 身を守るために] 殺された。 (統語的受動態)
 b. 太郎_iが花子_jに [PRO_{i*j} 身を守るために] 空手を教わった。 (語彙的受動態)
 c. 太郎_iが花子_jに [PRO_{i*j} 謝礼をもらうために] 空手を教わった。
 (田中 2012: 571, 一部修正)

(5a) では、外項とされるニヨッテ句「花子によって」がタメニ節の空主語と同一指標である

ことを示している。(5b) では、受け手名詞句「太郎」がタメニ節の空主語をコントロールできることを示している。そして、(5a) の事実に基づくと、(5b) の受け手名詞句が外項であると田中は分析している。一方、(5c) では二格で付与された与え手名詞句がタメニ節の空主語をコントロールできないため、与え手名詞句を内項であるとしている。この分析に基づき、「教わる」などの二重他動詞由来他動詞を伴う文の派生を田中は (6) のように示している。

(6)



(田中 2012: 572, 一部修正)

(6) では、受け手名詞句が vP の指定部が持つ EPP 素性によって、ReceiveP の指定部から vP の指定部に引き上げられ、その後、受け手名詞句が TP の指定部に上昇することが示されている。TP の指定部に上昇後、受け手名詞句が T と Agree することにより主語として認可されると田中は主張している。

しかし、田中の分析では理論的な問題点が生じる。まず、理論的問題点として局所性が挙げられる。Chomsky (2000) は、局所性は “closest c-command” に基づくと主張している。つまり、goal (ある要素によって c-command される要素) になりうる要素のうち probe (goal を c-command する要素) から一番近い goal が probe との一致現象の対象となることを仮定する。(6) で示された構造における内項の基底生成位置では、与え手名詞句が受け手名詞句

より上位に生成されている。したがって、EPP 素性が **closest c-command** すべき要素は与え手名詞句のはずである。しかし、実際に **vP** を経由して **TP** に上昇しているのは与え手名詞句より下位に生成された受け手名詞句である。したがって、(6) の構造において、受け手名詞句が **vP** を経由して **TP** に上昇していることは局所性の問題点として挙げられる。

次に、意味役割に関する問題点を挙げる。田中は、受け手名詞句が移動によって主語に昇格すると主張している。しかし、(7) の例文を見ると、二重他動詞由来他動詞の主語名詞句には「動作主」と「着点」の意味役割における多義性があると言える。⁴

- (7) a. 次郎が無理矢理山本先生に英語を教わった。 (無理矢理 = 次郎/*山本先生)
 b. 慎太郎が無理矢理上司から重要な書類を預かった。(無理矢理 = 慎太郎/*上司)
 c. ジョンが熱心に先生から生成文法を教わった。 (熱心に = ジョン/*先生)

「無理矢理」と「熱心に」は動作主指向副詞であり、これらの副詞は動作主が引き起こす行為のみを修飾する。つまり、この事実は動作主指向副詞を伴う文が容認されるためには主語が動作主でなければならないことを意味する。⁵ (7) の文は、動作主指向副詞を伴う文として容認できることを示している。したがって、二重他動詞由来他動詞の主語は意味役割として動作主が付与された名詞句であると言える。(7) は、二重他動詞由来他動詞を伴う文では外項を伴うという (5b) のデータに関する田中の分析と一致する。一般的に、外項は動作主と同義とされている。田中では、二重他動詞由来他動詞の主語が外項であり動作主でないとしている。つまり、田中の分析は理論的に矛盾していると言える。田中の分析に対し、本論では二重他動詞由来他動詞の主語は外項かつ動作主が付与された名詞句であることを主張する。田中が主張するように、移動によって受け手名詞句が **ReceiveP** の指定部から **vP** の指定部を経由して **TP** の指定部に昇格し、主語として認可されるとすると、この動作主の解釈を保証できない。では、移動した位置で名詞句に意味役割が与えられると仮定する。この仮定を採用すると、一つの名詞句に対して二つの意味役割が付与されてしまう。従来、名詞句と意味役割は一対一対応でなければならないという規則が (8) の θ 基準によって規定されている。

(8) θ 基準

- (i) Each argument bears one and only one θ -role.
 (ii) Each θ -role is assigned to one and only one argument. (Chomsky 1981: 35)

一つの名詞句に二つの意味役割が付与されるという予測を移動で解決しようとする θ 基準の違反であり、適切ではない。つまり、意味役割の多義性を保証するメカニズムについて言及していない点も田中の問題点であると言える。

2.2. 非対格他動詞

次に、影山 (1996, 2002) を検討する。影山 (2002) によると、本論で扱っている二重他動詞由来他動詞は「脱使役化」が伴っており、二重他動詞由来他動詞は「非対格他動詞」というカテゴリーに属すると主張している。「脱使役化」とは、使役者が意味の上では含意されるが、その使役者が統語表面上で抑制され表示されなくする操作のことを言う。

影山 (1996) では、(9) のような動詞の形態素 *-ar* には脱使役化が適用され、(10) のような意味変化が起こると分析している。

- (9) a. 公園には様々な種類の木が植わっていた。
 b. 壁にはピカソの絵が掛かっていた。
 c. (募金活動をして) 目標額が集まった。
 d. (海底トンネルによって) イギリスとフランスがつながった。
 e. 値段はこれ以上上まらない。
 f. ダンボール箱に雑誌がいっぱい詰まっている。 (影山 1996: 184)

(10) 接辞 *-ar* による脱使役化

概念構造 : x CONTROL [y BECOME [BE AT- z]]

↓

統語構造 : ϕ (影山 1996: 188)

影山 (2002) は、(9) に挙げた動詞のような形態素 *-ar* が付加された自動詞と同様に、形態素 *-ar* が付加された二重他動詞由来他動詞においても脱使役化が関与すると主張している。しかし、二重他動詞由来他動詞に脱使役化が伴っているとすると、ヲ格名詞句が主語位置に昇格することになるので、正しい文が派生されない。そこで、脱使役化が生じる前に所有構文への変換が行われることを主張している。これは、「教える/教わる」のペアが所有権の移動を意味するため、位置関係を所有関係に組み替える変換が行われていると仮定しているからであると影山 (2002) は述べている。したがって、影山 (2002) は二重他動詞由来他動詞の意味構造を (11) のように主張している。

- (11) a. 先輩が後輩に合格の秘訣を教える。
 教える : [x_1 CAUSE [y MOVE-FROM x_1 TO- z]]
 (x =先輩、 y =合格の秘訣、 z =後輩)
 b. 所有構文への変換
 x_1 CAUSE [BECOME [z_1 BE WITH- [y MOVE-FROM x_1 TO- z_1]]]

- c. 後輩が合格の秘訣を先輩から教わる。

教わる : $[x_i \text{ CAUSE } [\text{BECOME } [z_i \text{ BE WITH- } [y \text{ MOVE FROM-}x_i \text{ TO-}z_i]]]$

↓

 Φ

↓

後輩が

合格の秘訣を

先輩から

(影山 2002: 134)

影山 (2002) は、(11) のような派生により、抑制された外項 ((11c) における *x*) は統語構造に表示されないことを主張している。影山 (2002) は、このような特異性から、二重他動詞由来他動詞を非対格他動詞と呼んでいる。

次に、影山 (2002) の問題点を指摘する。影山 (2002) は、二重他動詞由来他動詞に対して外項を統語構造上に具現化させない脱使役化を用いて説明を行った。したがって、田中 (2012) と同様に二重他動詞由来他動詞における主語名詞句の動作主性について問題点が指摘できる。つまり、影山 (2002) においても、二重他動詞由来他動詞が主語に動作主を導入しうることを見落としていると言える。外項を抑制するということは、二重他動詞由来他動詞における主語の動作主性を保証できないため、影山の二重他動詞由来他動詞に対する分析も適切ではないと言える。

3. 二重他動詞由来他動詞と動作主性

本節では、二重他動詞由来他動詞の主語の動作主性について検討する。本論の主張の一つは、二重他動詞由来他動詞の主語に付与される意味役割は動作主であり、この主語名詞句が *vP* の指定部に基底生成されることである。この動作主性については 3.1 節で動作主指向副詞、3.2 節で動詞句前置を用いて、二重他動詞由来他動詞の主語の動作主性を検証する。

3.1. 動作主指向副詞

本節では、動作主指向副詞を用いて二重他動詞由来他動詞の主語に付与される意味役割が動作主であることを示す。本論では、動作主指向副詞として「無理矢理」と「熱心に」を取り上げ、二重他動詞由来他動詞と共に起できるかによって、この種の動詞の主格名詞句の動作主性をテストする。

(12) 「無理矢理」

- a. 松永先生が無理矢理太郎に英語を教えた。(無理矢理 = 松永先生 = 動作主)
 b. 太郎が松永先生 {に/によって} 無理矢理英語を教えられた。
 (無理矢理 = 松永先生 = 動作主)

(13) 「熱心に」

- a. 宮下先生が熱心に私に日本史を教えた。 (熱心に = 宮下先生 = 動作主)
- b. 亜美が熱心に石井先生 {に/によって} ツーシームを教えられた。
(熱心に = 石井先生 = 動作主)

(12a) と (13a) は一般的な二重他動詞である。これらの動詞を伴う文では、意味役割として動作主が付与された主語を伴う。(12b) と (13b) は、(12a) と (13a) を受身化した文である。Jaeggli (1986) や Baker et al. (1988) などの分析を用いると、動作主は二名詞句及びニヨッテ名詞句として具現化される。(12b) と (13b) が容認できるということは、ニ/ニヨッテ名詞句が動作主であると言える。上記のように、動作主指向副詞は動作主が引き起こす行為のみを修飾すると仮定すると、動作主が導入されない文では非文法的になることが予測される。

(14) 「無理矢理」

- a. *健は無理矢理鬼嫁を怖がった。 (*無理矢理 = 経験者)
- b. *花瓶が無理矢理壊れた。 (*無理矢理 = 対象)

(15) 「熱心に」

- a. *野村先生は熱心に鬼嫁を怖がった。 (*熱心に = 経験者)
- b. *花瓶は熱心に壊れた。 (*熱心に = 対象)

(14a) と (15a) は心理動詞「怖がる」を伴う動詞である。心理動詞は主語に「経験者」である名詞句を導入すると従来から言われている。この分析に従うと、動作主指向副詞は心理動詞の主語 (経験者) の行為を修飾しないと予測できる。実際、(14a) や (15a) が示すように、非文法的であるので「無理矢理」や「熱心に」が動作主以外の名詞句の行為を修飾することができないことを支持している。したがって、動作主指向副詞が伴う文が容認されるためには、主語が動作主として解釈されることが条件として挙げられる。

次に、(14b) と (15b) は「壊れる」という非対格自動詞が伴う文である。非対格自動詞は、一般的に内項として基底生成された名詞句が主語位置に上昇する動詞であり、意味役割としては「対象」が付与される。(14b) や (15b) が示すように、この文に関しても非文法的であるので、「無理矢理」や「熱心に」などの動作主指向副詞が動作主を示す名詞句の行為のみを修飾できることを支持している。

動作主の行為のみを修飾する動作主指向副詞を二重他動詞由来他動詞と共にさせると (16) のような結果が得られる。

- (16) a. 次郎は無理矢理山本先生に英語を教わった。(無理矢理 = 次郎/*山本先生)
 b. 慎太郎は無理矢理上司から重要な書類を預かった。(無理矢理 = 慎太郎/*上司)
 c. ジョンは熱心に山本先生から生成文法を教わった。(熱心に = ジョン/*先生)

(16) は、動作主指向副詞「無理矢理」と「熱心に」が主語名詞句の行為を修飾していることを示している。つまり、動作主指向副詞を伴う文が容認されるためには主語に付与される意味役割は動作主でなければならないため、二重他動詞由来他動詞の主語名詞句の意味役割は動作主であると言える。

二重他動詞由来他動詞を伴う文における主語が動作主であることを主張するためには、二重他動詞由来他動詞を伴う文が動作主を認可する環境で適格であることと、動作主を認可しない環境で不適格であることの両方を示さなければならない。二重他動詞由来他動詞を伴う文が動作主を認可しない環境で不適格であることを示すために、二重他動詞由来他動詞と意図性を持たない表現を修飾する副詞を共起させた (17) を見てみる。

- (17) a. *次郎は無意識に山本先生に英語を教わった。
 b. *慎太郎は気づかぬうちに重要な書類を預かった。

(17) で用いた「無意識」や「気づかぬうちに」という表現は意図性を持たない表現である。動作主は自ら行為を行う行為者を指すので、意図性を持たない表現とは相容れない。この事実は、(18) から支持できる。

- (18) a. *太郎は気づかぬうちに走った。
 b. *ジョンは無意識にメアリーにボールを投げた。

二重他動詞由来他動詞を伴う文における主語を動作主とする予測が正しいとすると、(17) の例文は適格でないことが予測される。実際に、(17) の例文は不適格であった。したがって、(17) の例文は二重他動詞由来他動詞を伴う文における主語が動作主であることを支持する更なる証拠と言える。

本節では、動作主指向副詞を用いて、二重他動詞由来他動詞が主語に動作主を導入することを主張した。これは (5) で示した田中 (2012) のタメニ節のコントロールのデータと二重他動詞由来他動詞が外項を導入する点で一致するものである。(19) に (5) を再掲する。

- (19) a. 太郎_iが花子_jによって [PRO_{i/j} 身を守るために] 殺された。(統語的受動態)
 b. 太郎_iが花子_jに [PRO_{i/*j} 身を守るために] 空手を教わった。(語彙的受動態)
 c. 太郎_iが花子_jに [PRO_{i/*j} 謝礼をもらうために] 空手を教わった。
 (田中 2012: 571, 一部修正)

しかし、田中では、二重他動詞由来他動詞の主語が外項であることについては言及しているが、動作主であることについては言及していない。本論では、二重他動詞由来他動詞の主語が外項であり、動作主として解釈されるとする。この二重他動詞由来他動詞の構造を第4節で提案する。

3.2. 動詞句前置

前節では、動作主指向副詞である「無理矢理」と「熱心に」を用いて、二重他動詞由来他動詞の主語名詞句が意味役割として動作主が付与されることを示した。本節では、動作主指向副詞に加えて、動詞句前置を用いて二重他動詞由来他動詞を伴う文における主語の意味役割が動作主であることを示す。

動詞句前置と動作主性との相関関係について言及したのは、Hoji et al. (1989) である。Hoji et al. (1989) は、(20) のデータから非能格動詞が動詞句前置を容認することを主張した。

(20) [v_P UBCに押し入りさえ] 学生が3人した。 (Hoji, et al. 1989: 7)

この Hoji et al. の分析を発展させ、(21) のデータから星 (2013) は主語に動作主の意味役割を付与する動詞のみ動詞句前置が可能であることを主張している。

- (21) a. [v_P 走り {さえ/も}] 花子がした。 (非能格自動詞)
 b. [v_P 太郎を殴り {さえ/も}] 花子がした。 (他動詞)
 c. *[v_P 倒れ {さえ/も}] 木がした。 (非対格自動詞)
 d. *[v_P 太郎を驚かせ {さえ/も}] その知らせがした。 (心理動詞)
 e. *[v_P 中国語が話せ {さえ/も}] 太郎がした。 (可能動詞)
 f. *[v_P 先生に叱られ {さえ/も}] 太郎がした。 (受動態) (星 2013: 2)

(21a) は非能格自動詞を伴う文であり、動作主が付与された名詞句が主語位置に生起されることを要求される。(21b) で用いられている動詞が他動詞であることから、動作主が付与された名詞句が主語位置に要求される。したがって、(21a, b) は動作主の意味役割を主語に付与する性質を持つ動詞のみに容認される動詞句前置の操作が行われても文法的である。一方、(21c-f) で用いられている動詞では例文上に動作主は具現化されない。(21) のような動詞句前置の分布については長谷川 (1990) が議論をしている。⁶ では、(22) を見てみる。

- (22) a. 太郎が [寿司を食べさえ] した。
 b. [寿司を食べさえ] 太郎がした。 (長谷川 1990: 249)

(22a) に関しては、以下の (23a) と (23b) の二通りの解釈がある一方、(22b) に関しては、

(23b) の解釈しか得られないことを長谷川は指摘している。

- (23) a. 今日はいろいろなことが起こった。
 太郎が寿司を食べるということさえ起こった。
 b. 今日は太郎がいろんなことをした。
 寿司を食べるということさえした。

(長谷川 1990: 251)

(23a) は「さえ」の作用域が文全体とする解釈であり、(23b) は「さえ」の作用域が動詞とその補部とする解釈である。長谷川は、この (22a) の意味的曖昧性をそれぞれの解釈に対して (24) のような構造を立てることにより説明している。

- (24) a. [IP NP_i-が [VP t_i NP-を Verb]-さえ した]
 b. [IP NP_i-が [VP₂ t_i [VP₁ PRO_i NP-を Verb]-さえ した] (長谷川 1990: 251, 一部修正)

(24a) は、INFL の tense 形態素が動詞と結合できない場合に現れる動詞「する」を伴う構造であり、この点において、英語の Do-support の *do* に相当すると長谷川は述べている。この構造は (23a) の解釈と対応する。一方、(24b) は、補部に PRO を配置する本動詞「する」を伴う構造で (23b) の解釈と対応する。受身文や非対格自動詞のような目的語位置に主語を基底生成する動詞を伴う文では、(23b) のような「さえ」の作用域が動詞とその補部とする解釈しか生じないことを長谷川 (1990) は指摘している。

- (25) a. 子供が先生に叱られさえした。
 b. 学生がオフィスに入りさえした。
 c. 雨がひどく降りさえした。
 d. 太郎が成田に着きさえした。

(長谷川 1990: 250)

(25) のような受身文や非対格自動詞が (23a) の解釈しか得られないのは、これらの動詞が本動詞「する」の補文にはなれないからである。したがって、INFL の tense 形態素が動詞と結合できない場合に現れる動詞「する」を伴う (24a) の構造しか得られないためであると長谷川は説明をしている。(24a) の構造において「さえ」を含む動詞句を前に移動させると「痕跡はその先行詞によって束縛されなければならない」という適正束縛条件 (Proper Binding Condition) を違反するため非文となる。(24a) の構造しか取ることができない非対格自動詞や受身文では「さえ」を含む動詞句を前に移動できないことが説明できる。

この動詞句前置を二重他動詞由来他動詞に適用させると、(26) のような結果が得られる。

- (26) a. [vp 加藤先生に因数分解を教わり{さえ/も}] 花子がした
 b. [vp 取引先の重役から契約書を預かり{さえ/も}] 太郎がした

(26) のデータから、二重他動詞由来他動詞を伴う文に動詞句前置の操作が行われても文法的であると言える。星 (2013) に基づくと、この事実は二重他動詞由来他動詞を伴う文における主語の意味役割が動作主であることを支持する。

本節では、前節で扱った先行研究に対する考察を行った。先行研究では、内項を主語化する田中 (2012) の分析や、動作主が統語構造上に表示されない脱使役化を用いた影山 (2002) の分析を扱った。これらの分析に対して、本論では動作主指向副詞と動詞句前置を用いて二重他動詞由来他動詞は主語に動作主を導入することを指摘した。次節では、本論の分析に基づいて、統語構造の提案を行う。

4. 受動形態素再考

本節では、主に日本語の受身文に対する新たな分析を行う。この受身文の分析を二重他動詞由来他動詞に適用し、二重他動詞由来他動詞の統語構造の提案を行う。本節で行う提案は三つである。一つ目は、二重他動詞由来他動詞を伴う文における主語の意味役割が動作主とする。二つ目は、受動形態素である *-rare* と *-ar* の性質を特定することである。三つ目に、受動形態素の性質を特定するメカニズムとして [±Agent] を導入することである。したがって、本節では受動形態素 *-rare* が動作主を導入すること主張し、その分析を二重他動詞由来他動詞に適用させることを目的とする。

まず、受動形態素が主語に動作主を導入するメカニズムについて議論する。従来の分析では、直接受身文の主語に受動者を要求しニ/ニヨッテ句に動作主が具現化されることのみが言及されている (久野 1973, Kuroda 1979)。

- (27) a. ジョンはメアリーに殴られた。
 「ジョン」 = 受動者、「メアリー」 = 動作主
 b. 花瓶が太郎に壊された。
 「花瓶」 = 受動者、「太郎」 = 動作主

しかし、(27) に動作主指向副詞を用いることによって受身文が主語に意味役割として受動者を付与された名詞句を取り、ニ/ニヨッテ句に動作主が付与された名詞句を取るとは限らないと言える。したがって、(28) のような直接受身文では、動作主指向副詞が主格名詞句の行為を修飾する解釈と二格名詞句の行為を修飾する二種類の解釈がある。

(28) 直接受身

- a. ジョンが〔無理矢理/率先して〕メアリーに足を踏まれた。
(無理矢理/率先して = ジョン/メアリー)
- b. 太郎がわざと先生に叱られた。
(わざと = 太郎/先生)

動作主指向副詞は (12) や (13) で見たように、動作主の行為のみを修飾する副詞である。したがって、動作主指向副詞を伴う文が容認されるためには、主語が動作主でなければならないため、(28) は主語に動作主が付与された名詞句を伴っていると言える。一方、(29) が示すように、間接受身文において動作主指向副詞を共起させると、主格名詞句の行為を修飾する解釈は得られない。

(29) 間接受身

- a. ジョンがわざと奥さんに先にスーパーに行かれた。
(わざと = 奥さん/*ジョン)
- b. ジョンが熱心に友達にタバコを吸われた。
(熱心に = 友達/*ジョン)

したがって、直接受身と間接受身が異なる構造を持つ可能性を示唆している。

直接受身文において、受動形態素 *-rare* が動作主を導入することを説明するためには二つの可能性が考えられる。一つ目は、直接受身文の主格名詞句が基底生成位置では受動者が付与されて、派生中に動作主の解釈を得る可能性である。二つ目は、基底生成位置から動作主の解釈を得ている可能性である。意味役割についての制約は従来から研究されており、 θ 基準、投射原理 (Chomsky 1981)、Uniformity Theta Assignment Hypothesis (Baker 1988) などが挙げられており、本論でも採用する。これらの制約によって、従来から派生中に意味役割が原則として変化しないと仮定されている。これらの制約に基づく、一つ目の可能性を棄却せざるを得ない。したがって、後者の「基底生成位置から動作主の解釈を得ている」という可能性を採用せざるを得ない。この可能性に基づき、本論では、動作主を導入する受動形態素の存在を主張する。この主張のために、受動形態素の性質に基づいてタイプ分けをする必要がある。つまり、主語に動作主を導入する受動形態素と受動者を導入する受動形態素の区別が必要である。

この区別を行うために、 $[\pm \text{Agent}]$ という概念を導入する。⁷ $[\pm \text{Agent}]$ とは、主語位置に外項を導入するかどうかを示すものである。 $[\pm \text{Agent}]$ を用いると、直接受身における受動形態素 *-rare* を以下のように分類することができる。

(30) タイプ 1 : $[-\text{Agent}]$

- a. ジョンはメアリーに殴られた。
- b. 花瓶が太郎に壊された。

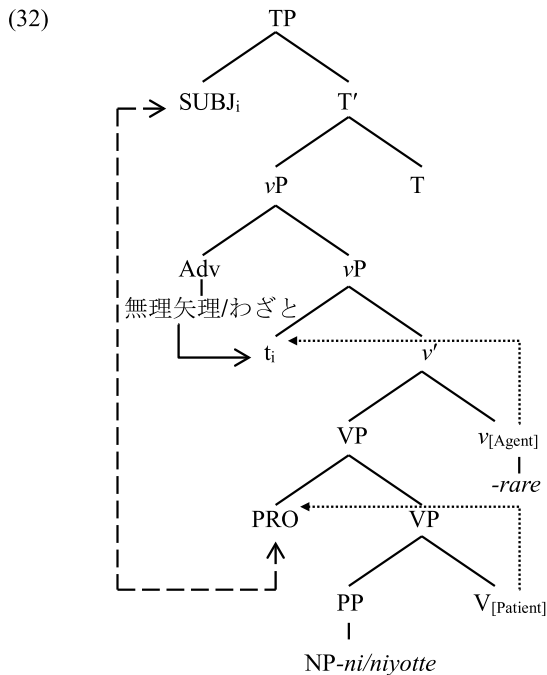
(31) タイプ 2 : [+Agent]

- a. 太郎は (率先して) メアリーにムチで叩かれた。
- b. 太郎は (わざと) 先生に叱られた。

(30) は外項を導入せずに受身化が行われる受動形態素 *-rare* を伴う文である。(31) は外項を導入し、受身化が行われる受動形態素 *-rare* を伴う例文である。(30) と (31) によって、動作主指向副詞が受身文において共起できることを説明できる。

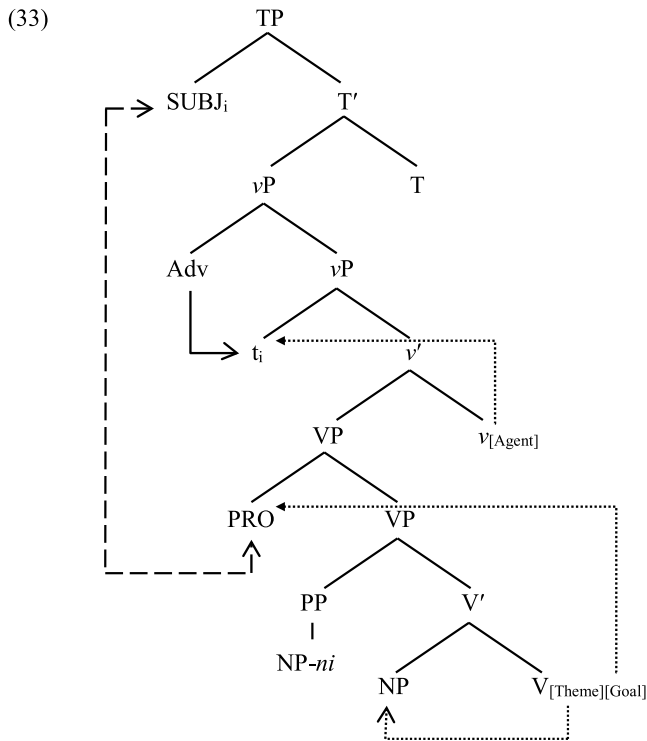
上記の受動形態素の分類を用いて、二重他動詞由来他動詞を分析する。田中 (2012) では、二重他動詞由来他動詞に含まれる形態素 *-ar* を受動形態素とした。本論でもこの提案を採用する。二重他動詞由来他動詞は、上記で行った動作主指向副詞や動詞句前置のような動作主性を容認するテストにおいて文法的であることが示されている。したがって、二重他動詞由来他動詞の受動形態素 *-ar* は (31) が示すようなタイプ 2 であると言える。

タイプ 2 に分類される受身文に関して、一つの疑問が生じる。本論では、タイプ 2 の主語は動作主であると主張した。実際には、主語は行為を受けているので、受動者である可能性を拭いきれない。この意味役割における多義性の問題を解決するために、PRO を用いて以下の構造を提案する。



(32) の構造によって、 v が vP 指定部に基底生成された主語名詞句に意味役割として動作主を付与する。同時に、 V が VP 指定部の PRO に受動者の意味役割を付与する。この VP 指定部の PRO によって、主語名詞句に伴う意味役割の多義性による θ 基準の違反を回避して、タイプ 2 の受動形態素を含む受身文を生成することができる。さらに、(32) の構造を提案することにより、(28) で観察された直接受身文の主語における動作主性も説明できる。動作主指向副詞が vP に付加することで、基底生成位置の主語を修飾する。この修飾関係から、主語が動作主である解釈が得られる。

この分析を用いて、二重他動詞由来他動詞を以下のように提案する。⁸



(33) の構造により、 v が vP 指定部に基底生成された主語に動作主の意味役割を付与する。同時に、 V が VP 指定部の PRO に着点の意味役割を付与し、 V の補部を取る名詞句に対象の意味役割を付与する。したがって、(33) の構造を想定することで、 θ 基準が違反されることなく、二重他動詞由来他動詞が伴う文における主語の意味役割の多義性を示すことができる。意味役割に加えて、動作主指向副詞についても (33) の構造によって説明が可能である。動作主指向副詞が vP に付加することで、基底生成位置の主語の動作を修飾する。この修飾関係から主語が動作主である解釈が要求される。 PRO を VP の指定部に配置すること

により、田中 (2012) の分析における T から最短距離にある名詞句 (与え手名詞句) より遠い名詞句 (受け手名詞句) が Agree によって TP に上昇する局所性の問題点も二重他動詞由来他動詞の主語が動作主であるとし、着点の解釈を VP 指定部の PRO に付与することにより解決できる。したがって、二重他動詞由来他動詞の構造に PRO を用いることによって、意味役割の多義性および局所性の問題点を説明できた。

本節では、受動形態素について議論を行った。従来の研究では、主語が受動者として具現化されるものにしか焦点が当たっていなかった。本論では受身文でも動作主を取り得ることを、動作主指向副詞を用いて示した。しかし、実際には主語が二格名詞句から行為を被っているので受動者と動作主との多義性が生じてしまう。この多義性を一つの名詞句で保証しようとする、 θ 基準の違反を引き起こしてしまう。PRO が VP の指定部にあれば、この違反を回避しながら文を生成することができる。同時に、主語名詞句には動作主の意味役割が付与されることも説明出来る。これらの意味役割付与を主語名詞句と PRO に分散させることにより θ 基準の違反を回避して、動作主を導入する受身文を生成することができる。この分析を二重他動詞由来他動詞に適用することにより、二重他動詞由来他動詞が伴う文の主語における意味役割の多義性に関しても説明が可能であることを示した。

5. まとめ

本論では、二重他動詞を由来とする他動詞の意味と統語構造について議論した。従来の分析では、二重他動詞由来他動詞の主語は内項として分析されてきた。しかし、動作主指向副詞と共に起させると完全に文法的である文として容認される。この事実から、二重他動詞由来他動詞は動作主を導入することを主張した。二重他動詞由来他動詞同様に、直接受身文においても動作主が導入されうる事実を示した。しかし、実際には受動者の解釈も得られるので意味役割が一つの名詞句に対して複数付与される可能性が生じる。この可能性は θ 基準によって制限されている。PRO を用いることで、この規則を回避しながら文を生成できることを示した。

註

* 本論の内容に関して、岸本秀樹先生に貴重なご意見を頂いた。また、木戸康人氏、前田晃寿氏に有益なご意見を頂いた。ここで深く感謝を申し上げたい。本論の不備は全て筆者に帰するものである。

1 二重他動詞と交替する他動詞の特徴として、(1) や (2) から、(i) 二重他動詞と他動詞における *-e/-ar* の交替、(ii) 二重他動詞の二格名詞句は、二重他動詞由来他動詞における主語に対応すること、(iii) 二重他動詞の主格名詞句は、二重他動詞由来他動詞における二格名詞句に対応することが挙げられる。

2 実際には、「教わる」などの動詞以外にも二重他動詞と他動詞とでペアを成す動詞がある。松本 (2000a, b) では以下のように分類している。

- (i) a. 教わる/教える、授かる/授ける、預かる/預ける、賜る/賜う
 b. 着る/着せる、浴びる/浴びせる、見る/見せる、(含む/含める)
 c. 悟る/論ず、借りる/貸す、かぶる/かぶせる
 d. 言いつかる/言いつける、仰せつかる/仰せつける、申しつかる/申しつける
 ことづかる/ことづける

(松本 2000a: 80)

松本 (2000a) によると、(ia) は形態上、二重他動詞が基本となっており、他動詞に接辞 *-ar* の付加による派生形であるとしている。(ib) は他動詞が基本としており、二重他動詞が他動詞に接辞 *-se/-e* が付加された派生形であるとしている。(ic) は語幹尾の /r/ と /s/ の交替によるものとしている。最後に、(id) は複合動詞の後項「つかる/つける」の対立があるパターンであるとしている。本論では、これらの分類の中から (ia) のみを扱うことにする。その他のグループの扱いについては、今後の課題とする。

3 田中 (2012) では、統語的受身文においてタメニ節の空主語が外項であるニヨッテ句と同一指標であることを示すために (5a) のデータを挙げている。しかし、田中 (2012) は、(i) の例のようなタメニ節の空主語がニヨッテ句だけでなく主語名詞句と同一指標になりうる多義性については言及していない。

- (i) 太郎_iは花子_jによって [PRO_{ij} 謝礼をもらうために] わざと殴られた。

(i) は、タメニ節の空主語と同一指標になるのはニヨッテ句だけでなく、主語名詞句も可能であることを示している。この (i) における同一指標の多義性は、タメニ節の空主語と同一指標である句が外項であるとするデータとして問題があると考えられる。

4 田中 (2012) では、統語的受動態と本論に挙げている二重他動詞由来他動詞は同じ派生であると主張している。しかし、(7) の動作主指向副詞を伴うデータでは、動作主が主語名詞句である解釈以外は得られない。以下の例が示すように、統語的受動態に関しては、動作主がニヨッテ句である解釈以外は得られない。

- (i) 次郎は無理矢理山本先生 {に/によって} 英語を教えられた。 (無理矢理 = 山本先生/*次郎)

田中 (2012) が主張するように、統語的受動態と二重他動詞由来他動詞が同じ派生であるとする、この動作主指向副詞が示す分布の差を説明できない。したがって、この副詞の解釈の分布の差において、田中 (2012) の分析は理論的に問題があると言える。

5 詳細については第3節で議論する。

6 長谷川 (1990) では、非能格自動詞と非対格自動詞をそれぞれ、Accusative 動詞と Ergative 動詞と呼んでいる。本論では用語を統一するため、非能格自動詞と非対格自動詞という用語を用いる。

7 受動形態素の分類に関しては Hoshi (1994) でも行われている。Hoshi (1994) では Passivization と経験者を関連付けて受動形態素の分類を行っている。本論では、動作主を導入するかどうかの分類を主張するため、Hoshi (1994) とは区別される。

8 ニ格名詞句における与格名詞句と後置詞句の区別については、Miyagawa (1989) や Sadakane and Koizumi (1995) などで指摘されている。Miyagawa (1989) では数量詞遊離が認可される条件が相互 c 統御であると指摘している。

- (i) a. *人が小さい村から2つ来た。 a'. 人が2つ小さい村から来た。
 b. *学生たちは車で2台来た。 b'. 学生たちは2台の車で来た。
 c. *花子は公園へ2つ行った。 c'. 花子は2つの公園へ行った。 (Miyagawa 1989: 31)

この分析を用いると、後置詞句は数量詞遊離が容認されないと分析される。この分析を二重他動詞由来他動詞に適用させると以下ようになる。

(ii) 数量詞遊離

- a. *ジョンは先生に 3 人言語学を教わった。
- b. *ジョンは上司に 2 人権利を授かった。

Sadakane and Koizumi (1995) では、後置詞句が分裂文の焦点位置に現れることができ、構造格が付与された名詞句は現れることができないと分析している。

(iii) 格マーカー

- a. *[昨日ピザを食べた] のは [NP メアリーが] だ
- b. ??[昨日メアリーが食べた] のは [NP ピザを] だ

(iv) 後置詞

- a. ジョンが手紙をもらったのは [PP メアリーから] だ
- b. ジョンがケーキを切ったのは [PP このナイフで] だ (Sadakane and Koizumi 1995: 9)

この分析を適用させると (v) のようになる。

(v) 分裂文

- a. ジョンが教わったのは [メアリーに] だ
- b. 太郎が重要書類を預かったのは [川原社長から] だ

上記の数量詞遊離と分裂文の分析から、二重他動詞由来他動詞の二格名詞句は後置詞句であると言える。

本論では、二重他動詞由来他動詞の二格名詞句が後置詞であることを前提として構造の提案を行う。

参考文献

- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論—言語と認知の接点—』 東京：くろしお出版.
- 影山太郎. 2000. 「自我交替の意味的メカニズム」 丸田忠雄・須賀一好 (編) 『日英語の自他の交替』 33–70. 東京：ひつじ書房.
- 影山太郎. 2002. 「非対格構造の他動詞—意味と統語のインターフェイス—」 伊藤たかね (編) 『文法理論：レキシコンと統語』 東京：東京大学出版会.
- 久野暉. 1973. 『日本文法研究』 東京：大修館書店.
- 長谷川信子. 1990. On VP internal subject hypothesis. 坂本正・阿部泰明 (編) 『日本語教育国際シンポジウム報告書：南山大学日本語学科創立記念』 249–254. 愛知：南山大学.
- 星英仁. 2013. 「虚辞動詞と VP 移動の統語的制約」 関西言語学会 第 38 回大会 ハンドアウト.
- 松本曜. 2000a. 「「教わる/教える」などの他動詞/二重他動詞ペアの意味的特質」 山田進・菊池康人・靱山洋介 (編) 『日本語 意味と文法の風景』 79–95. 東京：ひつじ書房.
- 松本曜. 2000b. 「日本語における他動詞/二重他動詞ペアの日英語の使役交替」 丸田忠雄・須賀一好 (編) 『日英語の自他の交替』 167–208. 東京：ひつじ書房.

- 田中裕幸. 2012. 「語彙的受動態における与格認可について」『商学論究』 6号, 567–581. 兵庫：関西学院大学.
- Baker, Mark. 1988. *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Baker, Mark, Kyle Johnson, and Ian Roberts. 1989. Passive arguments raised. *Linguistic Inquiry* 20, 219–251.
- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam. 2000. Minimalist inquiries: The framework. In Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, 89–155. Cambridge, MA: MIT Press.
- Fukui, Naoki, and Margaret Speas. 1986. Specifiers and projections. *MIT Working Paper in Linguistics* 8, 128–172.
- Hoji, Hajime, Shigeru Miyagawa, and Hiroaki Tada. 1989. NP-movement in Japanese. Ms. University of Southern California, Ohio State University, and MIT.
- Hoshi, Hiroto. 1991. The generalized projection principle and its implications for passive constructions. *Journal of Japanese Linguistics* 13, 53–89.
- Hoshi, Hiroto. 1994. Theta-role assignment, passivization, and excorporation. *Journal of East Asian Linguistics* 3, 146–178.
- Kuroda, S.-Y. 1979. On Japanese passive. In George Bedell, Eichi Kobayashi, and Masatake Muraki (eds.) *Explorations in Linguistics Papers in Honor of Kazuko Inoue*, 305–347. Tokyo: Kenkyusya.
- Jaeggli, Osvaldo. 1986. Passives. *Linguistic Inquiry* 17, 587–622.
- Miyagawa, Shigeru. 1989. *Syntax and Semantics: Structure and Case Marking in Japanese* 22. New York: Academic Press.
- Sadakane, Kumi, and Masatoshi Koizumi. 1995. On the nature of the “dative” particle *ni* in Japanese. *Linguistics* 33, 5–33.